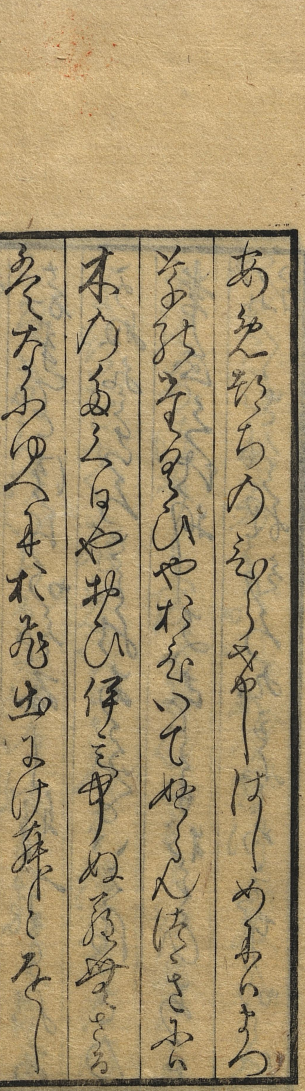
草木育種

土



文化戊寅新鐫

滝園岩崎先生著

草木育種

（さうもくそだてくさ）

全二冊

江戸書肆　千鍾房
玉山堂合刻

江戸日本橋二丁目
玉山堂記

[illegible]

[illegible]

草木育種序

孝經曰因其之道我地之利是種草木之法也不可不識也其穀可不飢緣其木而不穴其草稱可索定其麻可避其民吉治病芬香延祚英花艷草以為美觀曰采番菜以養口後草木之位大矣余自發菜好軒岐之道以為掌會者不能于業性多技術不明友情讀諸家本草及物產之出於

此乎夏鋤山堅之厚或焚財而光諸炎邦
培圃裳垂老至于一千餘種而芋木發至
然之性孤隱至性各世不無殖者是友為
紫飛者隱風經山河而復孤生作漿芋風
仙芸至實觸之破裹而發生浮蒜隱室暖
而浮沈芹花突生而遜波蓴芋世服而左
疆子竹籬寄生扶于木漲而保生女蘿得
宗壽而娘生莫孤子世根寄他章而生猿

史之無手而貼籬壁是皆造化自然之理
門俄人功乎夫芋木之漸至生也至至死
也至人豈得而主之然人為萬物之靈孤
長難至長能生難至生換回造化在掌握
友孤室至燥涵庭至室晏久各之服至性
雖無寺炎域南北易地人力亦可以奪至
功服至理而隱至性萬不失一氣性嘗本
芋之學種蔬之法不求而得之培蔬生夏

世不如全高今武厚多芝之不或觀玩莫
奇也種偃可見國家以菜也名為草木育
種唯近種藝日用之一助云爾
文化丁丑至日出于又玄堂宏崎當正

漢南奚定明出

草木育種目録

卷之上

序　凡例
草木の德をしるべし
草木に陰陽ある事
土地の善悪并水之事
草木に吉日凶日并宜せ忌との事
下種の事
澆灌并培養の事
接法　きりつぎ　たかつぎ　よびつぎ　たらつぎ　上せつぎ　并圖
　　こりつぎ　そぎつぎ　さしつぎ　あつぎ　根つぎ

擡附り壓條の事并圖
移樹并伐木の事
登盆の事附り養花挿瓶の法
除蟲法并蟲の圖
暑寒風雨霜雪の節心得の事
塘窖塗垂の事并圖
種樹運送の事

卷之下

穀菜果藥品花木類百八十五品手入の法

草木育種凡例

一 草木手入の事は。上巻に十四ヶ條をかて。種樹の要用を著す。その時節にをいては不同あり。假令は南國はよく。少しは遠く。又東西によりても寒暖あり。況本邦と漢土と。時節お違あるゆゑべし。茲にしるす処の時節は。東都にをいて自時代述。其國によりて考べし

一 凡穀類菜類の内。日用の物をもつ事。次に果類藥品草木類。又花美にして賞すべきもの。文物に供ふべきもの。又手入むづかしき類の種法をしるす

一 和名を挙て漢名をしるす。又漢名にて通称するものあり。

菊牡丹芍藥の類ハ漢名なきを挙。和名なきも又諸國の方言
多し。其内通じ呼名を挙て。なく見易からんがためなり。
尤和名漢名ともに。一二名を挙て同名異物を知しむ

一 一草一木の手入の事ハ。下巻にしるし。其一品に述る所ハ土
地の善悪。時節。種荷。其中の品。木の類ハ接法。さし木。とり木。
こゝろ入。除虫ゑ其ゑの手当等を知るなり

一 惣て草木の類幾百と云ゑ所しらず。悉く一品ごとに手
入を述ぶ事能あらず。先一類の内一品を挙て。龜鑑とす。其
類の物ハ大抵同じ手入にて。宜き物多し。其類を察し考て
知べし。猶天時の事ハ種樹書群芳譜花鏡等を考べし

一 野必大本朝食鑑。向井氏庖厨本草の作ありて。食物功
能を審にし。宮崎氏農業全書ハ種樹日用の事に詳なり。
漢土にてハ。賈思勰齊民要術ハ民用種樹の法並に飲膳
食治まで備。俞宗本郭橐駝等の種樹書。陳扶搖秘傳花
鏡の書皆種樹の事を載。此類の書猶多し考索べし。
此等の書にかぎらず。引書を挙て其法の伝来を知しむ

一 近世の秘法と自試法とを処。これを属に假名を以し。漢
文に傍注するものハ。童蒙に見易からしめんがためなり。然ども
予が陋拙文詞を能せざるに謬誤おほく觀者かえるまで解
かたからん事を恐る。遂て修改せむるを欲るのこ

草木育種巻之上

東都　岩崎常正　編録

草木は德をしるべし

後京極攝政　良經公　作庭記曰。人の居所は四方に木をうへて。四神具足の地となるべき事。○經云く。家より東に流れあるは青龍とす。則所の水なければ柳九本うゑて青龍の代とす。○西に大道あるは白虎とす。若し大道なければ楸七本うへて白虎の代とす。○南前に池あるは朱雀とす。若し池なければ槿九本をうへて朱雀の代とす。○北後にをかあるは玄武とす。則所の岳なければ捻常正按に和玉篇捻ミナルキと訓を字鏡にナツメト訓を爾雅注に捻棗となるに據り三本をうゑて。

玄武の代とまかくのことにして四神お庶の地となりて居ぬれば官位福祿そなわりて無病長壽なりといへり○秦始皇の書を燒儒をうしこし時を種樹の書おそのふくへしと勅下しなりとか○佛の法を成とき神のおまふたりあまひきる時を樹をたよりとしたまへり人屋むらのいとなみあるへきことか 以上作庭記群書類從中收者 ○史記貨殖傳言植木之利云安邑千樹棗燕秦千樹栗蜀漢江陵千樹橘淮北千樹萩 注梓木也 陳夏千畝漆齊魯千畝桑麻渭川千畝竹又云千畝巵茜千畦薑韭此其人皆與千戸侯等○大和本草云吾邦ニ植テ為民用有益物多シ木ニハ則白桐梧桐梓桃杏栗棗橘柑金橘茶楮漆桑朴椿山茶櫧槲椶櫚柳榿枒數種山椒梔梨榛杉檜樅羅漢松等也草類則麻苧藍紅花薯蕷油菜紫草茜芋也又竹類可植者多シ○按ずるに其外猶多し樺 シラカバアカカバ二種アリ などハ多く植べし北國に多し木堅して材となし又皮を剥て緒の器を製ずるし又此皮生にて能燃雨中に消ざる也鸕鷀をきふもの是に火把となして用ゆ然ハ軍用にも益あるべし

草木に陰陽あり事

種樹書曰麥屬陽故宜乾原稻屬陰故宜水澤といへども稻ハ向陽に蒸ばうけ陰溼に根をはじ陰陽ともに俱ゆへ百穀の長たり世俗惣て向陽の地を好ば陽性とし陰溼を好ハ陰性の草とするハ理を考ざるに似ゆ雖云ハ人參ハ陰地に生ずる故陰草のみ

なれども。全陽性なり。右に寒冷に傷せして向陽を恐。然天の陽氣に勝ざるなり。故に人參ハ陽虛を補。又地黄ハ陽地を好とも陽草にあらず。全く陰性ゆへ旱に傷せして。寒冷陰溫の地に傷ものなり。故に陰虛を補。凡草木に陰陽の性ある事如のごとし

土地の善惡并水此事

周禮考工記曰。橘踰淮而北爲枳。○南方草木狀曰。嶺嶠已南無蕪菁。種之則變爲芥。○孔志約曰。動植形生因方舛性。春秋節變感氣殊功。離其本土則質同而効異。乖干采摘乃物是而時非。名實既爽寒溫多謬。用之凡庶其欺已甚。施之君父逆莫大焉 本草序例

○土之生物。其成數在五。故草木皆五出。桃杏花有六出者。必雙仁。皆能殺人 瑯琊代醉 ○按るに。草木ハ地の毛髮といへり。人も血氣盛とれハ毛髮黑して光澤あり。血氣衰ときハ毛髮脫落し。或ハ白して光澤なし。草木もかくのごとく。地氣肥たる所に生れば。常にかはりて花され實のる。諸國の名產あるも。其物も去地に相應して。且地氣密處に生るゆへ。食物ハ味よく。藥種ハ効力他所に產せると遠ひ。氣味調て奇功ある數なり。又按るに。草木ハ地にもとづくゆへ去地の品を考るまと肝要なり。黑ぶくに好ものあり。赤つちに好物あり。其ちによきものあり。殊にとれものあり。草木各好む所あり。譬ハ泰山幽谷に生る草木ハ陽性にして清潔なり。右に多くハ陰地を好こ。糞穢に忘れ

多し。深山の土黒ぎくなり。故に植る事も又黒ぎくにうゆべし。又海濱
に生る草木は陰性にして奥影の肥を好。真土或は砂にうゆべし。
又原野に生る草木なれは禁ちにうゆべし。そもくの生る本ちに植る
事也。なり。豫土の品を下に志るす
○志のぶつち。地錦抄云。深山に數年木の葉うづめれて自然に黒ち
となりたる所いふ。又墓塚のくさりて出となりたるもいふ。又木の葉を蒸へ
うづむるを。半年にてとり出せは土となる。これも志のぶつちといふ○花
壇綱目に。赤ちに志のぶくさ所切交て。躑躅の數又とり木さし志に用て
妙え。おれをも志のぶちといふ○按に。年古き山なとは。厚五寸或は一尺
不どの間。人一重皆此ちなり。これ自然に草木の肥しとなる事なり。

是に赤土を加へて草の影なり
○武藏野の土。地錦抄云。巣鴨村辺より。板橋。深井。勝地。ちむさしあふ
似里。但し黒めなる所土とまた赤めなるは志の性おとれり。又石地の
竹藪をかりて。さらくとしたる黒き土なり○按に。黒ぎく土同黒辺
千葉木辺にもあり。黒ぎくの赤めなるなり○赤土。見壇綱目に。
蘭。けい百合。ゑび祿の影なり○おれは右の黒ぎくの肥けなきもの
なり。此ちに肥し所かけて木の影なり○又地を二三尺もかりて下に
ある。黄色にしてかたく祿ばりある。此ちは焼くさし木の玉に用る。惣て此ちへ
さし木所をれば。よく根を生ず。又祿ばりして粗く碎き。盆栽の鉢の
底におし入れば。水抜よく根腐せず。又細に碎て赤ちに又肥ちに交て。

蘭蘇鉄の類は用てよく生長に

○葛西の言云。地錦抄云。亀井戸辺より業平。隅田川の畝皆是

土にて。葛西に似り。小石交りたるは砂まつちなり。よくふるひとつふ

べし。又云言云は砂の甚うにて砂をなし黒き甚うなるを。砂のまぢり

たるは砂まつちといふ。芍藥によし。言云は水仙柑類菊などにおこ加へ

てよし○按に。真土には石作おにゆり。むめゆり松梨の類よし。又桃

樹にはく肥て甚く生ちを。但し鉢之の云にはたまりて乾き。余り

宜からず。水草は植るによし

○八王子の砂。地錦抄云。目黒辺にもまゝあり。雑司ヶ谷王子畝大

方似る砂なり。但し白めなる砂上とを。赤め黒色なるは悪し。小石あらば

ふるひと用也○按に。右の外又山川より深出たる細石砂は用とよし。海

河より揚たる砂は用也べからず。塩けありて拈るものなり

○田土稲は植る田の土なり。水草を植るよし。肥しには鰯などを入てよし又

自然に沼池などに埋て園となりたる。下湿地にて泥へ糸なとの腐たるなり。

小石まぢりてかたまり。或は乾き又は湿さぎて土の性悪し。悪ぎもよく

ふるひ去れ言にして植れはよし。林檎には お疲なり。又梨桃柿ぶどの類

をよし。又ちゝんおりを牽牛子などにしてをよし。樣子には此土に黒ぎくを

合せ植れば甚よし。其なぎ乾所へは洗ふ人糞等能こそぐべし。又

しめりがちなる所は水ちたをよくして附て墾たるよし

○けとふ土根岸辺は土中より極さる。稲の根数年は經て此土となると

云。又山形極てを出るゆへ出はものともいふ。土の色黒して輝く。此をもつて
つのまたを加へ移り合せ。意に任て石の形或盆の形など形似。それへ
志のぶ石韋法この影形うへ付てよく生長す。又石萬など極おだちに
入いよく水を吸あげて蟠まるものなり

水の事

按に。夏月園中の植木に水をそゝぐる。日陰になりて涼き時そゝぐ
べし。根めとへのみそゝぐだるべし。北西熱き山へそゝぐべし。夕方なれハ葉
にかかりてもよし。朝と昼中ハ葉にかかる形忌。夜日中にハたち
うへの影にても悪し。但し暑中鉢うへなどにハ忽乾て枯るものあるを。
その時ハ根廻へぬるまのあ形。葉にかからぬ中にそゝぐべし。又さし木

のある所へハ。ひづけ節に水をそゝぐてよし。盆植の物ハ。大抵縁の下
の土の志めり加減がよし。あ形多くかけて。井の邊位の土までハ濕り通
て根くさるなり

草木吉日凶日并宜と忌との事

婁元禮田家五行卷之下涓吉類

耕作田吉日　乙丑　巳己　庚午　辛未　癸酉　乙亥
丁丑　戊寅　辛巳　壬子　乙酉　丙戌　丁亥　巳丑
辛卯　癸巳　甲子　巳亥　辛丑　壬寅　甲辰　乙巳
丙午　巳酉　癸丑　甲寅　丁巳　巳未　庚申　辛酉
浸穀種吉日　甲戌　乙亥　壬午　乙酉　壬辰　乙卯

下秧吉日宜成日收日　苗代の日に用ゆるよし。世俗皆卯の日を忌

辛未　癸酉　壬午　癸未　甲午　甲辰　乙巳　丙午

丁未　戊申　己酉　乙卯　辛酉　己亥　乙未

挿殃吉日　田こへの日によし。苗代に前たる日より四十九日めをさん

甲子　乙丑　丁卯　己巳　癸酉　乙亥　丙子　己卯

庚辰　癸未　甲申　乙酉　乙丑　辛卯　癸巳　乙未

戊戌　庚子　辛丑　壬寅　癸卯　丙午　戊申　己酉

癸丑　戊午　己未　庚申　辛酉　癸亥

不收成日　丙辰　壬辰　辛亥謂之天地不成　乙未謂之

天地不成　凡播種俱合忌之

種作忌九焦日　卿所謂拈焦日也　九焦日は拾芥抄の九坎日と同れ也

正辰　二丑　三戌　四未　五卯　六子　七酉　八午

九寅　十亥　十一申　十二巳

壅田吉日　田を耕に よき日なり　用火日為吉謂丙寅丁卯甲戌乙亥之類

壅田忌土鬼有九日　田を耕に あれ日也　癸巳　甲午　乙酉　辛丑

壬寅　己酉　庚戌　丁巳　戊午

穀米入倉吉日　庚午　甲戌　乙亥　丙子　己卯　辛巳

壬子　癸未　己酉　戊子　己丑　庚寅　乙未　壬寅

癸卯　甲辰　己酉　丙辰　癸亥

田事避忌實録　田祖即神農氏。甲寅日死　田主。乙巳死辛

亥塟　田父。丁亥死丁未塟　田母。丙戌死丁亥塟　田夫。丁亥死辛亥塟　已上並忌開田耕作耕耘　后稷癸死。專忌播種

種菜吉日　庚寅　辛卯　壬戌　戊寅

種麥吉日　庚午　辛卯　辛巳　庚戌　庚子　辛卯

種瓜吉日　甲子　己丑　庚子　壬寅　乙卯　辛巳

種麻豆吉日　甲子　乙丑　壬申　丙子　戊寅　壬午

壬寅　芝麻忌西南風。不忌則悉變為草

種樹書曰。凡樹木當元日日未出時。以斧斑駁推析棗李等樹。謂之嫁樹。又曰。凡果實初熟。用雙手摘則年々生果。見麝香薰則花不結子。又曰。果實異常者。根下必有毒蛇。切不可食。又曰。花果樹

如曾経孝子。及孕婦手折。則數年不著花。或不甚結子。又曰。果子先被人盜喫一枚。飛禽便来喫。凡果木未全熟時摘。若熟了即抽過筋脉。來歲必不盛。又曰。凡種好花木。其傍須種葱薤之類。厥麝香觸也。又曰。種花菓處栽數株蒜。遇麝香則不損。又曰。鑿果樹納少鍾乳粉。則子多且美。又樹老以鍾乳末和泥。於根上揭去皮抹之。復茂。又曰。凡種樹宜在望前。在望後少實。○花鏡曰。七月耡地最能殺草。○按に搂種接樹櫻惣て諸の草木を植るに。九焦日見前南風火日（暦に天火地火とある日なり）と忌といへり。○地錦抄云。草木ゝ苗は毎月節の日まくべからざ。暦にせろとある日なり。耕作にはせろまきとて大よきろふ事なり。接木さし木を無用なるべし。但し節に入刻を除

其餘はくるしからずといへども。一日ふ用たるべし

下種の事

按に土は草木の母なり。これ動物の胎と嘗と同じ。母の氣血調和
されば其子自安し。草木を又然り土地の陰陽を考。草木の陰
陽の氣さるゆゑ一なり。蠶は万年青。たゝんの実は月の氣きろふて
根の本にあり。左は日陰にまき。五穀菜蔬は陽に属するものなり。中
にも稲の穂は葉の上にありて陽氣の得て実のる。左は陽地に種。
又木の類を多しまにしるを○種の貯るに事あり。其実のる
ものあり。秋実のるものあり。何をよく実入る時先一を見て肉を剝て木の核をる
べし。肉は皮に満。仁は殻に充て硬ければ。これ実のりさるなり。まづ一本

の草なれば一本の採て試。一本の草なれば一穂の貯りて試べし。たゞ
なきにあらずと初より殊ごとに播とりて其種いまだ熟せざる時は種を其
事なり。必得べし。実人よりなればとりて一ある乾て湿をとり紙袋に入て
嵐のつゐ所へ掛置。或は葉に入貯べし。又子をとりて虫に蔵ものあり。これを
どりまきと云後に見也○惣て種は本体なり形小なれども氣盛
なるゆゑ本体にまきれり。左に諸の草木の子。左の離しく数日光
せざして生ぎ。生草は一付左を離る時は拈る。其氣薄を忘べし。甘
蔗は稀の帯に残し。法の志だ類は苑なして実は葉の背にあり
あれらの拙稿は下巻に詳なり

○代の事

瓜茄の類を前に先志後の作るべし。志ろは一呼にても

半坪にても。圍を稲草にてかこひ。内の土を耕し細にして。土之高
の踏たる藁を厚くしき。其上之外土を以しき。又其上之灰と人糞と合
せて腐したる物一重しきて。其上之種を以ふせ。生て一二寸なるとき
畑へうつせ。

○種を下すに。時天吉日を擇まくべし。土は物により肥しのつよきは
悪し。但し瘦地におゝざる所を。安く耕し軟にして前へ穡粳の類
水田にまく物は。まづ所を以さりて前長せるにしたがひ所を増なり。
燕の花は陰に前て後水澤に移べし。蓮荒姑烏芋睡蓮などは初
なり所に前なり。烟草は種を灰にまぜて前上を踏つけ面を
又諸の種細小なるものは細き土とまぜてまくべし。風雨に動くかこ

寄ぬるゆへ。又小にして狂き種は生るまで苗おひをしてよし。凡
種を下て虫に水を入る事悪し。又とりまきにしるものあり。惣て草
木は実熟すれは自然に落生る理なり。假令は菜蔬けしの類
秋前て春夏花さき実のり收る。春前ものは秋花さき実のり
收る。何を其前時節に收るは自然なり。其とり前といふは種早く
拈易きものなり。人参などは実紅く熟したる時採て虫に出まぜ。
其云の渥ず乾ぬ加減にして。其焼け鉢へ入て埋め置。時節にて
時ならず虫にて前うゆるゝ。又草木の内にも。遠く種をへだてたるものあり。
これらは実を以とりたる時虫に地へ前置。冬は雨雪を除おひして
雪は生るものあり　○種樹書曰。凡果須候肉爛和核種之。否則不

類其種。と云り今俗に実うへとて。閉とをに植るゆあれども。生るゆ
遥く又腐易して悪し。閉を去くうゆべし

澆灌 并培養の事

按るに。山野自然に生ぞる草木は。実熟して自落腐爛されば。
則その物乃肥となる。草木は草蒸さく是実が厭蔓木は秋葉落て
去が覆ひ実を凌是自然の理なり。志る所実を採去。或は葉が掃
除などするは理に逆ものゝ。故に手入培養の法が用ざれば生長せ
ざる。花鏡云。人力亦以奪天功。と誠に然り。又曰。澆灌人之需
飲食也。不可太饑。亦不可太飽。と云り凡草木に用る肥廿一品
あり。後に審なり。又人糞馬糞などの糞物を始めあり。種樹

書曰。花木有不宜糞穢者甚多。尤宜問用之。非其宜立稿。と云り
蘭百兩金杜鵑虎茨枇杷杜衡などに糞が用ゆを忌が如し。又神
社の庭或は神前に供せる草木等にて。糞穢の物が用難ゆ
あり。かくの如き所は代に用る肥あり。于鰯灰汁油糟酒粕等が
合せ腐して用は大抵同様に肥るなり。左傳曰。蘋蘩薀藻之菜。可
薦於鬼神。と云ふ水草にてうきくさ又もの類は糞汚に觸ざる
故。清潔にして神に供せべしと云り

○肥土 又臘土 農圃四書 ともいふ。拵る法は年に耕作せる山畑の
去へ。至の後人糞をそゝぎ。寒にいてさせて乾し。又糞がそゝぎて
乾せるゆ三度。其後面にあてゆゆうに貯置。春分の頃日中にさし。度に

切かえまを付よく虫蟻の類。又草の根芥の類を指捨てよし。是をまて虫ハむれ腐て地むし。蚯蚓の類を生して害ゆるす　農圃四書蕪菊肥土の法也

まれを諸の菓木菊などゆ植るとき。交わらせてうゑへし

○三和土　地錦抄に合肥と名く。其法ハ野土三斗。赤土一斗。黄土一斗。右三色よくまぜ小おやりゆふるひ。人糞一斗。炼合せ五十日ゆどねしくつゝふなり。用る時藁の灰又ち糠ゆ炒て切まぜこるもよし

○又曰。南に並木いけ垣炼屏のたぐひ高山などなる陰ハ小陰とて必冷氣の地なり。一二尺を三四尺も遥氣のがるものゝ此ハ合肥多入てよし魚洗けなどハ肥をまぜて菓の性のびゝ立たつき易るものゝ。合肥ハ後種限に肥の理なり。又曰草花ハ惣て五年なり。二月中旬

まぐ肥を用へし。菓出て用ハ却て傷。若用ゆハ合肥を用べし。かけ肥ハ必きろふなりといふ。按るに生て後。かけ肥を用ゆるよし。植て後肥不足に見ゆれバ。物によりてかけ肥を用てよし

○花鏡云。八月草類宜肥。木類忌肥

○溝池の泥并水　種樹書云。香草などにて。糞を用ひ。其物にハみぞいけの泥。或ハ米泔水などゆそゝぎてよしとなり。又溝の土ゆ揚さし乾てよくふるひ石竹。牽牛子の類よし。又黒ぶくしゆ。いろ分に合て採さうにより

○厩肥　まやげおのともいふ。代の内へ入る肥なり。農民おのくおれゆ用ゆ。其法ハ五年人糞に灰をまぜ合せ腐し。種ゆうゆる時

まづ厩にて馬の踏たる藁を厚くしき。其上へ砂をしき。其上へ糞
けをそぎて。諸の菜類の種をうゆれば下より温氣のぼるゆへ早く
生ずる。又畑へ苗を植る時も。かくのことしてうゆれば。物によりて始終肥
に及ばず。又藁の代りに馬糞を用ゆるもあり

○人糞　諸の草木の肥は人糞を第一とす。えくきくは他の肥
に勝れり。何の肥にもましづまぜてよし。花鏡云。正月七分糞三分
水。二月六分糞四分水。三月對和。四月四分糞六分水。五月三分
糞七分水。八月四分糞六分水。九月對。十月六分糞四分水。十一
月七分糞三分水。十二月八分糞而止。○地錦抄云。人糞一桶に
水二桶入。五十日ほど置く。青きあのごとくになりたる時用ゆると云。

按にうけ肥は。雨を催したる前にうけて雨降が引くよし。むかし肥
ちへ入るには水を出し刻たるがよし。何も人糞はよく腐たるがよし。然るを
今俗傳に。寒肥と云ふ。草木の肥にうぎゝぎと用ゆるよし。碎云は
虫なりとは。其中は蟄して食を求ぎ。其後氣になりて食を求む。
草木も又此のごとくなれば寐がゆし。其に至て眠を含む時は寐がゆし。
此時肥を用ゆ。渇するに水を與がゆし。大抵芽をする前に用べし。
弱き草木などに。寒中強き肥を用ゆ。却て傷腐ものなり。但し
木の類はよし。又極かへて直に肥をそぐる事也。若用たくは肥ちを
ちへまぜ極てよし。根づきて後肥を用べし

○人尿　菘芥の類に用ゆ。よく腐して用ゆべし。種樹書に云。

瑞香などハ湿を好。根もとに蚯蚓ある時ハ志めるゝ。此時小便をそゝげバ
みづ皆死といへり

○鰯 和名 弥 又 鰮魚 国書ともいふ。肥に用ゐるハ有りといふ。ごまめより
大なり。おまめも田にくりも皆用てよし。地綿抜云。糸に入て蚕
くさらしても用ゐ。大方ハ生まゝよし。花壇綱目に下肥にいたむ事ハ
用へし。よく炒粉にして用といふ。按るに。有りハ臼にて挽粉にして
用ゐべし。然らざれバ鳥獣皆合ふなり

○洗魚水 地綿抜云。魚洗汁ハ蚤物にたゞ四五日蚤を用べし。
魚の腸ハ久蚤さらして用ゆ。花壇綱目云。根に肥の入る事ハ用ゐ。
緒草とそに根ゆへ用ゐといふ。種樹書曰。月桂花葉常若

蟲食者。以魚腥水澆之乃止。又曰。種香菜常以洗魚水澆之。則香
而茂。○地綿抜云。南に日陰なり。後日乾不ハ熱地なり。魚の洗汁ハ
おへうすくして。おしづかけたるハ陰氣ハまゝ。土に湿をやくこてよし。合肥
油糟などハ無し。去乾き植物枯るものゝ。又石の如なる赤土又ハ焼上。此
などにて。焼くべきなる所ハ一二尺も去の性なし。是蚤なり。魚洗汁
ハごえなどにて。去ハ補潤なるがよし。焼去ハあまり性なく。蚤とぎてく。
はよき肥ハなべて無し。魚の汁何にかけ。米泔ハ此帯にそゝぐべし。又
石砂多き地ハ実地なり。無去多く切ませて。魚洗汁くだし肥鰯肥
油糟等のおもしはよき肥ハ無しまゝ。肥ゑらなるハ必植物いたむ。
地肥なると見ハ肥無用なるべし。此見合第一なり

○灰　竈又ハ火爐の灰も。人糞に合せくさらして祈うし。瓜類茄麦粟黍稗等の肥に用ゆ。花壇綱目云。山慈姑青らんの仙等ハ葉灰を用ゆ。其外くだし肥にまぜかして用ゆ

○酒糟　酒かすに籾糠を切まぜ。圓子のごとくに炼貯置。其ふ時に水にとき。人糞を合せ稲田に入るよし。又紫苑葡萄などの蔓長く出るにかよし。又松の勢悪きに根廻りへ入る。又藝茂するなり

種樹書云。種藕以酒糟塗之盛

○油粕　胡麻の油粕より草木の葉の光沢をよくす。右に蘭。たらんに用るよし。花壇綱目に云。荏の油糟ハ牡丹芍薬の類にこれてよし。但秋にはなりなり

○陸鼈　夏の内よくくさらして白くなりたる時畑へ切まぜ。八月に至て麦をまくなり

○米泔水　米を研ぎたるみなり。蘭百両金たらん硃砂根紫金牛茶等に用てよし。又香氣ある草木ハ溝泥水にしろこゞを合せそゝぎてよし。又潺湲の溝の土乾て篩ひ捨るなり交用てよし

○糠　炒て人糞にまぜ用ゆ。籾糠ハ酒粕に人糞を合せ田の肥に用ゆ。又めみぬ所にまて孟宗竹の根に蒔くよし

○豆餅　豆腐の滓にてからなり。よくくさらして用ゆ。なまぜて又肥土となす

○馬糞　花壇綱目云。寒氣にいたむ草木によし。又暑氣を嫌

草にも根ぎりへ重べしといふ。又牡丹の根まつりへ冬の内多く重てよし。
る糞ハ多く用ゆる有賤へ重べし。○馬尿ハ花壇綱目云人尿より
和なり諸草にあべて用

○獸肉の類　涅盤經曰。如橘得鼠其果子多と云り鼠を人
糞汁に漬重くさりて浮る時。柑類の根へ埋る時ハ実多し。又猫肉
牛によろしきなり。物類相感志に入へたり。其外諸の獸よく腐爛する
時根ぎりへ埋てよし。古紙皮の類もよし

○牛糞　桃を植る時牛屎に五分まぜ埋重。甚よかり植かへてよし

○羊屎　立夏の前。羊屎を泥に合せ。蓮をうゆる時ハ花多し。
花鏡云報春先用羊鹿屎和水澆。又暑月澆冷茶。

○猪糞猪尿　種樹書曰。木樨當用猪糞。又冬青樹凋瘁。以猪
屎壅之則茂。一說猪潔灌之。又曰。凡種花欲得花多。須用肥土。秋
冬間壅根。春来着花自然盛。以猪尿和土令發熱為肥土。

○鷄糞　種樹書曰。鷄屎壅茉莉則盛。壅百合則甚滋生。と
いへ今ゆる烟草燒心草龍鬚等の肥に用ゆ。又菊株等等の肥に
まぜ用ゆへ花の立をよく生きるの妙なり。其諸の鳥屎皆よし

○介類　蛤蜊文蛤其外諸介類。桶へ水入漬重。腐たる時
殼をとり揚。其水用ゆ。松に用くよし

○塵埃　燕子花石菖萍蓬草烏芋慈姑等の水草に入てよし

○茶滓　暑氣にいたむ草木の根ぎりへ重てよし。南天蘭類に重べし

○草綿子　桑の根皮へ入。又緒木の根へ入るよし。又油を榨てさる粕も用てよし

○梳頭垢膩　たらん。又多木影の根皮へ入るよし

接法の事　并圖

燕居筆記曰。接法有六。曰身接。曰根接。曰皮接。曰枝接。曰壓接。曰搭接。○農圃四書曰。桑二月而接也。有插接。有劈接。有壓接。有搭接。有換接。○葉世傑草木子曰。植物去皮枯。氣在外也。動物敗內死。神在中也。大和本草　○張約齊種花法注云。春分和氣盡接。不得夏至。陽氣盛種不得立春。正月中旬宜接櫻桃木樨徘徊黃薔薇。正月下旬宜接桃梅杏李半支紅臘梅梨棗栗杵楊柳紫薔薇。二月

上旬可接紫笑綿橙匾橘。已上種接莖。於十二月間。沃以糞壤兩。至春時花果自然結實。立秋後可接林檎川海棠黃海棠寒球轉身紅視家棠梨葉海棠南海棠。以上接法並要時。將頭與木身。皮對皮骨對骨。用麻皮緊緊纏。上用箬葉寬覆之。如萠出相長。即撤去箬葉。無有不盛也。○柑橘橙等。於根棘上接者易活。○接樹須取向南隔下者。接之則着子多。○梅樹接桃則脆。桃樹接杏則大。○凡接花木。雖已接活。內有脂力。未全包生接頭處。切要愛護。如梅雨浸其皮。必不活。以上種樹書　○按小農政全書小接枝又審ゆり本邦小接枝ゆとあり。其木によりて何節のよき何接べし。何を九焦南風天火地火の日ゆ忌べし。先その接砧の木は三四歲より六七

歳まぐの木は勢よし。又四五葉といへどとおせたる木は悪し。十葉餘の木にても勢よしは又接べし。大樹へ接とは枝の勢よき所は殊外の枝は皆截さて。その殊たる枝へ接なり。是をなるつぎと云。又砧樹は接て接付は長き根は切たさむがよし。又切るにはしむるのも接梢のなるは去年のびたる木は七年接なり。木は長くのびて勢よく。肥たる木を切とりて接なり。又弱木は接たる木の枯ぬ事にまとべし。葉にてかとひ。又ちぎりまど入蚤なり。風を忌べし。又接て行なて。壺の切口と種の切口へ蠟或は墨は塗とよし

○換接　又根接とも云。則だれつきなり。仕様は先木は大根の切口へさし。或は木にいけ蚤。砧樹をきり。其切口の鋸めは小刀にてけづり

人行に四五町程。刀は蚤て接べし。但し木口は水けなき木は蚤に接てよし。その砧の木口は方より。木の心と皮との刀を竪に小刀にて一寸程けづり根にへぐなり。むへぐに甚かげんあり。木によりて皮の厚きものあり。薄きものあり。又大木は厚く。小木は薄し。若薄は皮を厚くけづりて。木のしんに小刀かゝる時はつかぎ。其時は接口は勢て。けづり蚤さべし。扨木に眼は。二ツ三ツかけて。二寸餘にきり。片この皮を心にうらぬかゝに竪にけづり。口へ含だし。砧のへぎめ一寸なれば。木は一寸一分ほどにけづるなり。外の方の皮より。たちに切接て。そのけづりめの。其方を内にして。砧へたさむなり。其砧の切口より。そのけづりめは。一分ほど出してたさめば。其外より砧の切口へ肉あがるなり。砧太ければ二口も三口と接べし。扨

其上を。お葉にても。水きる麻にても。その動ぬ物に巻なり。其
あとせめのすかぬ物にまくべし。お葉なれバかたく巻麻などにくハ
かたくしめ気ゝ巻ハ悪し。気ゝまく風ハ。木くびをとく肉のあゞり悪
悪し。然ども横砧梅砧などを。かたらかに巻バつゞ。木にもよろゞし。
扨砧の木口よりつぎめの所ハ。お口らにて包。又紙にて封する法もあり。
其上を竹の皮にて。ゐにさらぬ物におそひ。面をふせべし。又気ゝ
数百本も接にハ葉にて包たるまゝにて。その先をおしたの上に出し。
皆うづめうへて。低く平に蘆づをかけ。又圍をおもにてかとひ風雨ハ
ふせべし。種の勢気をたきてるゝめに。たゞらくるゝ芽を生ぎるに志
ゞつく。たゞだんくに志べし。扨其接たる所へ掏のさらるゝを見よくかとひく

鳥獣をふせべし。風に根ぬり物うかゞひ。砧より芽を生ぎれバ。まくか
きれべし。だんめ気ゝ出れハつゞ。又そより葉ハ生ぎる法ハ見合竹の
皮ハ切志べし。移樹るにハ夏の去用をもつて。秋又其うへかえてよし

○高接　一二丈も上の枝へ接なり。気ゝ枝の無る所を接。其法
ハ右にかゝる事なし。但し砧の切口并にそのかまぬ物に接る所へ
割竹か又茅の類にてかとひ。其間へ去ハ入。そをおし出し。其上へ少
葉ハ元気なり。是を漏斗といふ。又竹の皮の間へ去ハ入。葉を植ハ
日をよけて潤なり。又竹の皮の外へ木の枝を添ふ。葉の止る所
ふせべし。又器に砧芽をかきれべし。又枝ごとに其に接ハ枝接といふ。
是つぎこけなり

○壓接　仕方ハ切つぎの法に接てよし。又葉を生じて其葉かゝ
ありたる間接もよし。又よび接ハ間節なく。四季ともに接るもあり。何も
接方ハ同ゆゑまづ其接べき親木を撰へ伏て枝の地に近き所に
砧木ゑ入れ枝をよびて其切敷ざして接なり。但し砧の皮ゑ
なぐるハ小刀を下より上へけづり。皮ハ捨てよし。扨其寸法ぐらひ
其の皮ゑ片こぎあり。薄くけづり合せて接し。行の手入ハ前のごとし

○身接　是ハ夏などに接に砧の切口より。一寸も二寸を接
口をさげて接なり。夏ハ木の勢ゆゑ枯くゞるゆゑなり。百姓金
大山まんげ其の木の影皆服へ接なり

○皮接　これハ其まゝ親木ゑ入かえずして。其まゝ垂て

接なり。是ハ砧の木ゑ盆にうへ。或ハ根へ去ゑつけ葉づとのごと
にして。其接べき枝の所へ。木ゑ入れ去ると結付。ほゝ垂つゞなり。
葉にて根を包たるハ。夏中日に。根のとへ水をそゝぐへし。右
何も切たるすゝハ。夏接たるハ枯の法肉あがりて砧木より十分
に。其勢氣かよふをゑて。まづ其の元の所を半分ほど切。又数日後
残る半分を切たるすなり。然ども よくつきたるハ一度に切たるしてもよし

○劈接　松などハ皆ゆりつぎし。惣て木軟にして。つゝ易き
ものハ皆ゆりつぎよし。假ゑハ砧のふとき指の如くなれバ。接木を指の
ふとき也。砧と其と同じ大さなるべし。扨砧の切口の正中をゆし割て。
其方をけづり。其の方も元を其方より其ゆゑにそぎ。砧へ大さみ去ゑ


接法の圖
常正自画


高接を漏斗に仕かけたる図
身接の図

壓接の圖

よびつぎハ。親木を祝して。種。そのよく砧へつて。柄よ。ゆが。絲木を祝して。結。枝さ。そのを接なり。砧の皮ハ切さるしくよし。その方ハまり接のゆく。紅よくらぬやうに。削合て接なり

春接さるハ。柄ふまりて。蟲さり。その方をなくなるくらいに。よくつきたるとき。先。蟲ろ小刀ふとく切り。二三十日を捨て。おるまるを切さるすべし

劈接の図



搭接の図



挿接の圖



水つぎの圖



○搭接　砧も木を同ふときにて。砧をたすまそぞ。又木も
たすにそぎ。合て巻をとへ剤仕ぬ竪まそへ。其上を志りとおき。
うどかぬ中にして。接めまぐ志ぬけうゆるへ。牡丹を接まへ此法へ

○挿接　是ハまつ。其接べき木ぬ長く切ゑ擺をする程に
志へさして。その木の先ぬ。よび接の如まして接なり

○水つぎと云あり。是ハ其接木の元ぬ水へ入て。挿花の如にして。
其先を接なり。そのいけたる水ハ二日ぐらいに入替てよし。右
さし接水つぎなどハ。木よく枯てつゑ難きたぐひにて。よび
接にをなし難きものを接法なり

○根を砧として接法あり。是ハ砧にする木を掘。其根の勢

よく皮のきれいなる所より。切ゑて志ぬ砧の如まして接
なり。大木一本をあれば。砧木数十本を得べし。惣て根へ
接用ハ志ばらく蒸て。去年の水気ぬかまして接べし。又
強き木など但一本にして。外に砧とする木をなければ。
其木の根を切ゑて。砧となして接べし。臘梅連翹などハ根
より芽を多生ぎるゆへ。常の砧木の如にしてハつゑ悪し。
根ぬ砧にして接べし

擺　附り　壓條の事

種樹書云。凡種花木。須冬至後立春前斫直接。有鶴膝如大母指
者長二尺許。札干羊魁中。掘令寛調泥漿。細切生忌一束。攪於泥

中。以細土覆之。勿令實。當有花次年結実。○農圃四書。蓺桑之條曰。耨地而糞之。截其枚謂之嫁留。近本之餘尺餘許。深埋之出土也寸。焉培而高之以泄水。墨其瘢或覆以螺殼。或塗以蠟而瀝青油煎封之是防梅雨之所侵。糞其周圍。使其根四達。若直灌其本則聾而死。未活也不可灌水。灌以和水之糞。二年而盛。○花鏡曰八月藤本者。皆可扦活。○按ニ。扦插の仕方ハ二三月さきものあり。或ハ梅雨中さすものあり。又秋さきものあり。其内梅雨中にさきものあり。惣てさすにハ大風又俄でりの日を悪し。雨後俄にたる日を窺日の出ぬまへ己の刻までのうちさきべし。そこさきを杖ハ横に勢こちこく芽の出ざる前。又ハ年



擺の圖

のびたる新枝をさすにハ。葉の茎かたまりてさす。もき二三寸位に切。葉多ければ二三枝並く。ハさきみ挿くよし。むさきを方ハきれ心に切。赤ちの内黄色なる古紙煉。固子結如にして。其ちへさして極。是を丞ざしと云。又山葉類の堅き木ハ。元を二ツに割て小石紙挾ミうゆべし。又拇指くらいよりふとき枝をさきとるハ。もき一二尺に切て。枝あらバ一枝並く。ハ皆切挿くさきとなり。さす所の切口ハ。小刀にてけづりたるよし。其さきを地色。赤ちの濕たる所にて日陰にさきとべし。又縄へさきとるを赤ちの入てさきとべし。何も変て水をそぎてよし。扨よくつきて根紙生し。又葉紙生じて。其葉かたまりたる所。各お庶の古地へ極えてよし

壓條の事

種樹書曰。凡接矮果及花。用好黄泥晒乾篩過。以小便浸之。又晒乾篩過。再浸之凡十餘度。以泥封樹皮。用竹筒破両半封裹之則根立生。次年断其皮。截根栽之○按に花鏡に過貼とも云り。其法ハ種樹書に説とも同。ちへ牛羊糞を交入と云つ。惣てとり木ハ。木の枝にあし疵をつけ。たるめて井を添。しろと結つけ。ちへうけ埋蛮く。古乾ハ水或ハ人糞へ紙入。落しくそぐべし。其疵の為より根を生ずるなり。其根ちへよく入たる所。枝の元をきり蛮後外へ極かへてよし○又枝ふとしてたるめがたし。又枝高して地に埋ぐたる属ハ。ふとき竹紙以て。罰を一ツ籠て間に切て。

二ツに割置。扱とまたはせむとおもふ。枝の皮に小疵をつけ。そきぐの西へ右の竹を合て縄にて巻。赤土の黄ゆるる土へ肥土を少しまぜ合せ。さらぬ根に竹の内へ入置。此土の乾ぬやうに苔をつけ或ハ小草を挿て。罌に竹をそぐべし。根の生ずる頃を考て竹をとり。初疵を付るなし下の西を半分も切かけ置。又竹を合せ。前のごとくに志て置。いよ〳〵根のよく生ずる時。跡半分を切て遂して。お庭の土へうへかえてよし。又ふとき枝をとるにハ。跡の穴より枝を通。跡の内へ土に肥土を入て。右のごとく切れもよし。又小科だへ或ハ木の根もとにある枝をとるにハ。桶をそへ置土を入るもよし。又木によりて根にて取るあり。その木の芽の出ぬまへに。根もとを



壓條の圖

諸木 如此土の竹西へ少し疵をつけて埋或ハ竹をうけ。或ハ藁にて土を包。下かけバ疵の西より。根を生ずるなり

ゐり根を切れ。其切口を上へ出すよく肥さるなく植置バ。
数日を経て芽を生ずと。見ハさし木。とり木より丈夫にして。おき仕方ハ

移樹法事　附リ伐木事

淮南子曰。夫移樹者。失其陰陽之性。則莫不枯槁。高誘曰失猶易　○齊民要術曰。大樹髡之。不髡風搖則死　又曰。植樹。正月為上時。二月中時。三月為下時。○種樹書曰。凡移樹不要傷根鬚。須濶垜不可去土。恐傷根。諺曰。移樹無時。莫教樹知。○又曰。今移樹者以小牌記取南枝。不若先鑿窟沃水攪泥方栽築。令實不可踏。仍多以木扶之。恐風搖動其顛則根搖。雖尺許之木。亦不活。根不搖雖大可活。更茎上無使枝葉繁。則不招風。種一切樹。大枝向南栽。亦向南。凡樹要移

當三年一樹得拙而枯。然未可一槩論。若以桂為丁在下釘則枯。在上磑則茂。種樹木。用穀調泥漿水。於根下日沃水無不活者。凡花木。有直根一條。謂之命根。趂小栽時便盤了。或以磚石承之。勿令生下。則他日易移。○按ニ。大和本草ニ云。植かへハ宜き所ニ背べつきがたく。つきても栄ず。大抵木ハ入かえるニハ夏木ハ春栄いまだ出ざる所。正二月ニ宜。秋栄落て九十月ニ宜。冬木ハ落葉出て。よくかたまりて後ニ五月植べしといふ。木によるべし。大概春の初植るとよしときを云り。地錄抄ニ云ふも。又氏のよし。凡木を植とき。乞得あり。遠く大くあり。大き根あらバ。根を切拒ゐて切てよし。鋤鍬などにて切バ。根の皮爛るゆへ。植て後くさる

なり。若年久く居たきたる大樹ハ根粗く類少ゆへ云わち悪し。二三年
前村節より此村。根を片々掘切也。枝を切結蚕二年めに。又片々を切也。
まづ其所へ種蚕細根を生じて後種蒔てよし。是を轉垜の法といふ。
大木ハ枝を高く切てよし。方角の向を遠ぬ事なし。種る法あれども。
種所に寄て向の遠ぬもあり。一槩にも云がたし。木を種るに是。
初より二三寸も深く種る心得にてよし。初より深く種ハ必傷
ものなり。種る法ハまづ。根の形より大きく掘。柔き土を下へ敷其
上へ樹を立て根の上より細き土を。さらくとふりかけ。細き木の
枝ゆへよくつき込。又土を少け。木にて根の下まで土の行こゝ
ゆへにつきこみて水をそゝぐ下。又右の如く細き土を根是へ入れ

木にてつきなぐら。水を高く流す時ハ土を少よく根是へ引入るなり。是を
水くへと云。いづれも種と云ふ。其蚕の丈夫なる木へ種る樹より竹を
渡。縄にて志ると結蚕べし。其結所ハ竹へ疵をつけてよし。竹ハ随分撰
こゝし。筋遠ぬ樹に直に結付てよし。竹ハ二本ヅ十十如此なる
樹に渡すべし。種て二三年の内蚕をとる事なり。蚕を蒔べし

伐木事

禮記月令。孟春之月禁止伐木。鄭玄注云。為盛德所在也 ○周官曰。仲冬斬陽木。
仲秋斬陰木。○齊民要術曰。伐木四月七月。則不蟲而堅肕 ○花
鏡云。十二月伐竹木不蛀 ○按に。木を切にハ蚕木を林檜桃梅
李の類。正二月沢芽の出ぬ前より。小枝ハ小斧或ハ鎌の類にて。

皮の損ぜぬ様に切べし。又鋸にて切る事は。小刀にてけづり。切口へ蠟。或は墨を塗てよし。其上を油紙にて包ミ置べし。冬木にて。志い。かし。もちの木。の類は二三月に切べし。諸木皆暑中と雪中に切を忌。○田舎にて。合抱よりある木を切時は。其へ酒を傾と云

登盆の事　附り　養花挿瓶の事

按に。盆栽は土乾ぎ濕ず。よく下へ水の抜るを第一とす。陶盆にても又花盆にても。水抜の穴秤要なり其穴は漏斗の如にもあるなり。なきをよしとす。穴の所内へ引込たるは。出りへ水滞て悪し穴の所低がよし。扨穴を覆に。何の甕器にてもくゞき。其上にふせて穴を覆べし。文蛤などは鉢によりて。水抜悪ゆあり。花鏡に。建蘭を植る法

に云。用盆先瓦片塡底後以煉過土覆上。とされ妙法なり。蘭百両金などは鉢へ植るに。盆の底の穴を大くして。其上を覆に赤ちの黄にて。かくまつたる土は。あらくくだきふるひて。其師に従ふる粗ちは入て植るべし。水よく抜て根腐ゆるし。物によりて植る合紀を切まぜるもよし。惣て植る法は。まづ陶盆を下に重。植木の根元は。いくちんどへあてがひ。四方より土は。さらくと入。土一盃にあらるる時。前後左右へ暫動べし。其の空虚のなきためなり。植て一番多事をそぎ。或は大雨に逢ふを忌。其のかくまるは恐るなり。肥を嫌ふ木は。年を土はあらくに入替てよし。又肥を好物は。其の乾めなる時先。其を箸の様なるものにて和げ蒸。よく稀しなる紀を根出りへそぐべし。

又鉢植を地に蒔く久く居つく何ハ水拔の穴より。蚯蚓升るなり
鉢の内にすむとそれハ必温てつゆに根腐さるものあり。蒔く蒔ハ
鉢なるよし。其蚯蚓を去法ハ後に見る也。又藾鉄松の鉢ハ棚にのせ
蒔てを。其蟻の有ものあり。まくされ取なるよし

養花挿瓶法

秘傳花鏡云。凡花滋雨露以生。雖瓶養亦當用天落水。每日添換其開庶久。若三四日不換。花必零落。蕋必乾枯。每夜宜擇無風有露處置之。猶可多延一二日之鮮麗。此乃天與人參之力也。折花之法。不可亂攀。須擇其木之叢雜處。取初放有致之枝。或一二種比枝配色不冗不孤。稍有畫意者。方剪而燔其折處挿之。則滋不下洩。花可耐久。蓋有不宜清水養者。又不可不察焉。如梅花水仙。宜鹽水養。而梅更宜醃猪肉汁。去油俟冷挿花。且瓶不結凍。雖細蕋皆開。若貯古瓶中。常刺以湯遝。能結子生葉。海棠花須束薄荷葉於折處。再以薄荷水浸養。細蕋盡開。梔子花折處須搥碎以鹽入瓶中。乾挿自能放花抽葉。花謝後鹽仍可用。牡丹初折即燃其皮。不用水養。常以蜜浸自榮。謝後蜜仍可用。芍藥燒枝後。即挿水瓶中。夜間另浸大水缸內。早復歸瓶。則葉綠花鮮。蓮花先用泥塞其折孔內。再以髮纏之。先挿入瓶。後方灌水。夜置無風有露處。則菡萏皆開。芙蓉。竹枝。金鳳花。皆當以沸湯養之。乘熱即塞瓶口。則花易開而葉不損。若蜀葵。秋葵。芍藥。萱花等類。宜燒枝挿。餘皆不

可燒。凡貯瓶中水。須燒紅瓦片投之。則水不臭。冬月將濃灰汁和酒灌瓶內則不凍。鮮肉凍汁養山茶臘梅。則開耐久。如瓶口大者。內置錫管。冬月貯水不碎瓶。若小口膽瓶等。投硫黃末數錢。亦可免凍之患。○種樹書曰。催花法。用馬糞浸水。前一日澆之。三四日方開者。次日盡開。又曰。冬間花瓶多凍破。以爐灰置瓶中則不凍。或用硫黃置瓶內亦得。又曰。芍藥牡丹摘下燒其柄。插瓶中。後入其柄。以蠟封之尤妙。○古來菴の挿花水畫の傳書に云。汀青ハ[illegible]活て[illegible]日も持ぎ。先切[illegible]花葉とも水に浸。往水にあげたる時揚て。油の葉つき隱より後の方に小刀にてたち[illegible]のかよふ[illegible]にして。葉づき隱へ山椒ゟ麝香を少狹ミ丈

低く活べし。花ハ花首へ竹串さし被。水氣を通ゆり。又あへ酢にさしてもよし。茂ハ朝日の出ぬ内切て。根に燒て花首へ酒を吹べし。あへも酒を加へよし。又日中に切て活るならば。根を燒れ後へ活べし。二時ばかりハ持ものも。竹ハ朝日の出ぬ内切て。根にはさまる切。罷に二ツ程被。あへ庵がしとはさまる入。葉ともに養てはし。寒竹などハ程ん養にて。勿論葉なき氣條などハ。水揚ず指て固立ぬものなれども。水行後程ハ生花の甲斐あるまじ。往て出をべし。本賊ハ節を細き竹串にて被。青より水に養べし。是をさしく固立ぬ葉なれども。ケ様のものに第一出につくまべし。あかなけあるものをよしと。傳書に見ゆ。牽牛花ハ出てよりさ葉なり。醫閭むと

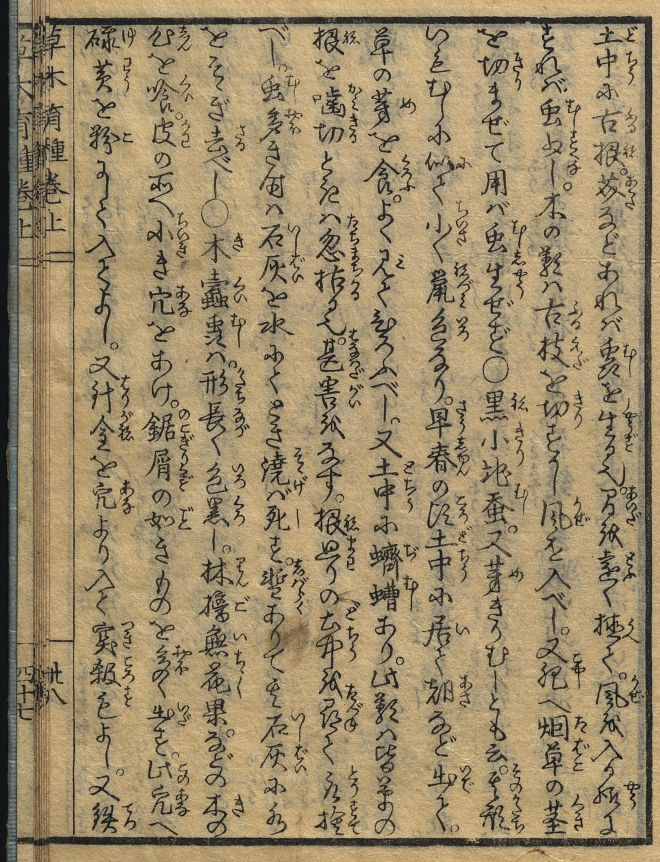
ゆゑ蒼紙。青に切く蔓葉ともに。水十分に漬置。紙を完きたる紙活べし。随分冷き水よし。朝宮の内はおものなり。旋花は活むと思一ぬるまへに。蔓ともに切。水完盛る大桶へ漬置よくあを吸せて其朝の蒼ばかり活べし。甚よろしき花なり。紅を其で其中くまゝ其もおぼ。岡河骨は葉の花の類。日の出ぬ内切く。糸だくへあを以。養て活べし。油を割て辛子紙少すきみて活は粗は。秋海棠は油の節を。槌にくくち置しやぎ。葉漂まで水に養置て活べし。随分吸たくのあよし。若紅葉は朝よく切く。水へ木通の粉を入養て活べし。秋の紅葉は。粗木の性よろきゆへ。根紙以に割木通をすきこ。糸だくへあ紙以水なべしへ麻せ置活べし。以上水養のあらまし紙しるとしり○按に。草木ともに惣て。日の出ぬ前に切く。其に生る時は。よくたゆらぬものなり。挿花の事は。瓶史にも頗委し索考べし。竹などは甚むろしく。或傳に培あるに養置活ばよくおとしるを。其外あるよりて家々の秘傳あり

除蟲法並圖

種樹書曰。種木無時。戴毛虫於根下皮。以甘草末擦之亦佳。又曰。臘月二十四日。種楊樹不生虫。又曰。斫松樹。五更初斫倒便削去皮。則無白螘。又須擇血忌日以斧敲之云。今日血忌。則白螘自出。又曰元日天未明。將火把於園中百樹土。從頭用水燎過。可免百蟲食葉之患。又曰園圃中四旁。□種決明草蛇不敢入（常正按にバブサウと云あり漢名望）

江南又蛇滅門草とも云。流猪よりの名。偏枯又蛇多の時節を捷く蛇を避ると云。偏枯みゝ蛇のくさはふと云ふ事なるべし。又蛇の映明草ハ木草綱目の映明草の影ハ形甚相似たる故よく映明草も又蛇を避るとをあやまれり。又曰。濯洗布衣灰汁洗瑞香必能去蚯蚓。且肥花。以瑞香根甜灰汁。則蚯蚓不食而衣垢又自肥也。又曰。柑樹為鬼所食。取蟯窠於其上。則鬼自去。又曰。果樹有蠹出者。以芫花納孔中。即或納百部葉。又曰。果木有鬼蠹處。以杉木削小丁塞之。其蟲立死。又曰。生人髭掛樹上。鳥不敢食其實。又曰。桃李蛀者。以煮猪頭汁冷澆即不蛀。又曰。果樹生小青蟲。町蜻蛉掛樹自無。

○按ずるに。白斂未置花根下。辟蟲易活。凡樹をうゑかゆる時。根のまく大蒜一ツ。甘草少ざくり入て拵へうゑ。蟲を生ぜざると。花繁ふさへうる。凡草木ふせる蟲。甚多し。其蟲をよく見定めて。其蟲を去ふるすべ。



土中ふ古根。あるをあれバ蟲を生ずるゆへ。能く拵へ。風ふ入ゝやうとすれバ虫ふつかぬ。木の數ハ古枝を切とり。風を入べし。又犯ゝ畑草の茎を切まぜて用バ虫生ぜず。○黒小地蚕又蚤きりぬーとも云。ゝ根いとひふく小く蔓ゐるり。早春の泥土中ふ居て胡ゐど歩く。草の芽を食よくそこなふゆへ。又土中ふ蠐螬あり。此類ハ根を噛切とるゆへ忽枯る。是害ふる事。根のそばの土弁ふ穴ゐくる。捜ゞ虫多き時ハ石灰を水ふくゝさ焼バ死を。ゐりてそ石灰ふあとそゝぎ去べし。○木蠹虫ハ形長く色黒し。林檎無花果ゞの木の皮を喰。皮の面へ小き穴をあけ。鋸屑のごときものをその生ゐし穴へ。硫黄を粉ふくゝ入るよし。又汁金を穴より入て実報をよし。又狭

炮の焔硝を捻紙より辺穴へさし入て火を付れハ忽穴の中へ火
氣通じて虫殺ぎ死す。又虫の穴へ燈油をさしてよし。此虫法木
に付ものなり○草木ともに風入ありきにハ木蝨。又ありまきとも
いふ虫。多新葉の所へ付。日にふへてひしと。とり葉とかたへを芽拾る
なり。其所ハ虫の聚ゆ居るゆへ。烟草の為を以て焼てよし。又鰻鱺の
骨を焼て煙てよし。又麥藁の灰をふりかけてよし。又常の灰
にても以て振べしあぶらむし生ずる所。必蟻多く聚ゆ。虫をふせ有。
蟻を拂捨べし。又鼈甲を其多く虫ハ蟻集るを喜ぐ持行て拂べし。又
砂糖を虫蟻を聚て其捨てよし。花鏡に云。蟻穴以香油或羊骨引
出之。又蟻做窠須置一浅盆坐水使蟻不能渡といへり○古書と

いふものあり。百両金紫金牛柑橘橙類の葉のうらに砂の如小き虫
多付とかたへ葉落て傷なり。つき初ゆるきバ刷毛を以て水を洗て
よし。又柑橘建蘭新に疣の如にして扁虫を生ぎ群芳譜に。是を
蘭蝨といふ。ときに其去法ハ魚洗汁をそゝぎ。或ハ大蒜を摺て其に
解。筆を以て洗べし○土中に生ずる。糸虫と云あり。形糸の如にして
長さ二分色白し。是肥強して湿熱より生るなり。草の根を腐らせ
ものなり。集り居る所を其とをに其捨てよし。○桃樹に生ずる。小さ
蠐螬あり。初二分ばかりにして色薄青し掃帚にて拂べし。此虫桃
実の皮よりくひ入て実を喰○螟蛉ハ菘蘿蔔苽などに付き
虫なり。毎朝拾捨べし。○蠐螬ハ夏中大なる蝶飛来て葡萄薯蕷

鼓の新枝へ卵をうえ付て去るなり。二三日めに一二分のいもむしとなる。青きもの葉色のもの黒きもの有あり。生長されば指の大さ有なり。脊に星ありて眼のとし○橘裏と云あり。橘柑橙柚菜萸椒鼓の香ある木に多し。これを蝶飛来て卵を新枝へ着る也。是は頭大にして蚕の如く。此を狭ハ黄赤色の角を出し甚臭し○尺蠖を諸木に生ず。よく見て指えべし○蚝蟲に種々あり梅桃李林檎などの枝に卵を着蚕なり。形鍛のとし。其の内を種べし。此卵三日月頃かへりて虫となり。木の又へ巣をかけ。数百あつまりて新葉を喰ふ。其形あさぎ色にして鳴あり。是を元法ハ焼油を筆う布に浸。虫の巣を拭えべし。又油をたゞ焼てもよし。虫忽死也○樹の根もと。

或ハ剣所の内。又ハ板屏壁などの日陰に。線の如くして長く産付たる卵あり。削さるべし。捻蚕と云ハ春になりて皆小さき毛虫となる也。此鼓に毛多くありて。脊に金色の光ある紙半夏左帝といふ枝或ハ樹の皮に居るなり。○又八九月頃桑櫻。あるかしに鼓の木又草の葉にも生ずる桑樹虫あり。初ハ蜘蛛の巣の根に見也。葉を喰筋をのこして。其葉葉袋の如し。巣の小なる時枝を切捻べし。捻蚕バ冬に至て。虫皆根もとに下り。枯葉の下。或ハ古中に塞を凌ぐ。春に至て草木の芽出を喰。又桃梅林檎等の実を食。大に害をなす也○林檎海紅等に一種の毛虫を生ず。三日月頃一葉巣になり。隠れて一枝皆蜘蛛の巣の如くなり。葉を残さず喰也。巣の小なる時葉を残て。枝を剪て遠く捻べし


蟲の圖
黒小地蚕
同上
木蟲
蘭蟲
一名かぶらむし
木蠹蟲
一名ちつぷらむし
ぞむし
ちむし
糸むし
毛蟲
春桃
桑樹蟲
秋桑
橋蟲
一名さんせうむし
半夏太郎の卵
菊虎
さんせうむし

そまの雷丸ハ柘木の姿とある。或ハ云、仕虫ほろのむしとゐりて。外の是
豬蚤又実ハ喰害をなす。○菊虎ハ形蜚ゝ似てわる。蜚ハ菊苗の
宿根より生ずるといふ。故に蜚ハ古根を捨べからず。二月比早朝ハ出て
菊艾新の若葉を吸かじ。又ハ卵を産ゑるそ吸さるゝ二ケ所ゟ
筋あり。下の吸ゟ水ゟ出る。蜚を二つ割ハ中ハ黄色の赤き卵あり。
そまの雷丸ハ菊の外ハ入ず蛙とゐる。形よなりて菊儀ハ拾ゐるのゝ
○さんせう虫ハ形ちさく甲羽あり。夏の比雌雄の
花を咬又柳ハ集りて葉ハ食ふ。又酸漿ハ集り葉を食ゐのゝ。
第一排べし。○蛞蝓蝸牛ハ草木の葉を喰ふ。毛虫のやうに捨べし。
○鼠ハそまの根ハ食ふ。害をなす。ゆゑに猫おハ仕まして葉を

おゝ土中ハ埋共中に捨ハ来らず。又妙法あり。海参を切く干て土中に
埋ぶべし。よく逃去ゝ。そのまゝハ虫を除ゐのみ。○油うるゝ虫ハ蚯蚓
升とゝハ水被ゑるゟ捨おゝさるゐのみ。無患子の殻を煮る汁を
焼ば皆死を。又生ゐる小便を焼ハそ逃去のゝ。ゆゑおをまくべし
風雨暑霜雪寒の節ハ得ゐる事

五雑組曰、百草不畏雪而畏霜。蓋雪生於雲陽位也。霜生於露陰
位也。不畏北風而畏西風。蓋西轉而北陰未艾也。北轉而東陽已
生也。○風烈村ハ強ゝ立づけ。捨未大ゝ。ゆゑおゝ。ほ捨ゐ
下へゆとべし。又捨ゑる草木ハ乾有若ゐさゝ仕の後ハ。ゆくハ。
そのゝの根の丈夫ゐるゐ仕後ハ。ゐゝと結有ゑべし。○大雨又

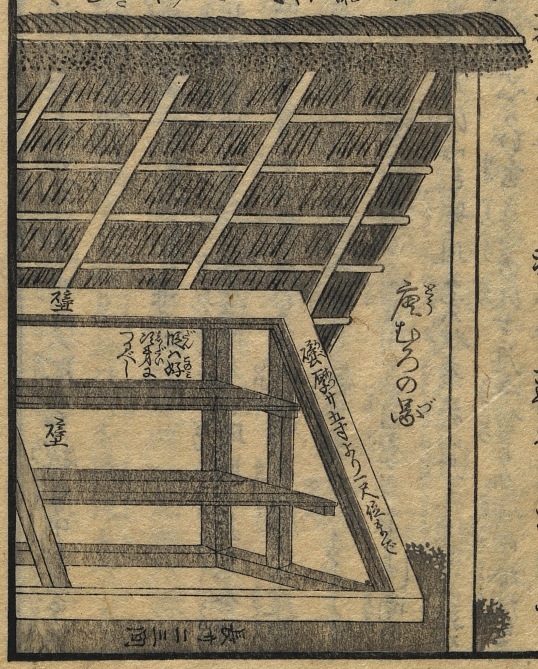
霖雨の節は。建蘭の類松葉蘭百両金等は内へ入べし。雨無久つく
降つゞけば。追て根のくさり易類を見入べし○暑氣に向節は。鉢こんな
仏付水は澆べし。日中にて土白く乾ば根へ沢り澆べし。日陰にあれば
葉のこゝろ澆てよし。又陰を好種物は暑中には蘆箔を二重に覆べし
○十月中旬に藁を以て。南向にかこゝ寒さし根へ鉢種を入るなり。
日さしは土際まぐふき下し。水風を防べし。又盆栽にて寒にいたまぬ
類は。高き地を極て。鉢こゝろを高く集て堅く埋てよし。齊民要術曰。
放火作煴少得煙氣則免於霜種樹書曰。棘能辟霜。花果以棘園
中即茂○雪降前には枝細くして折易物は竹を添結ぶべし。さり
しまは。ほこ。ゑど縄にて巻ぶべし。松の枝。又竹などを雪にて折る

ものなり。節を振い落してよし○寒中には肥ひ枝を接ぶる。むかしの
法より窖の手歯あるべし

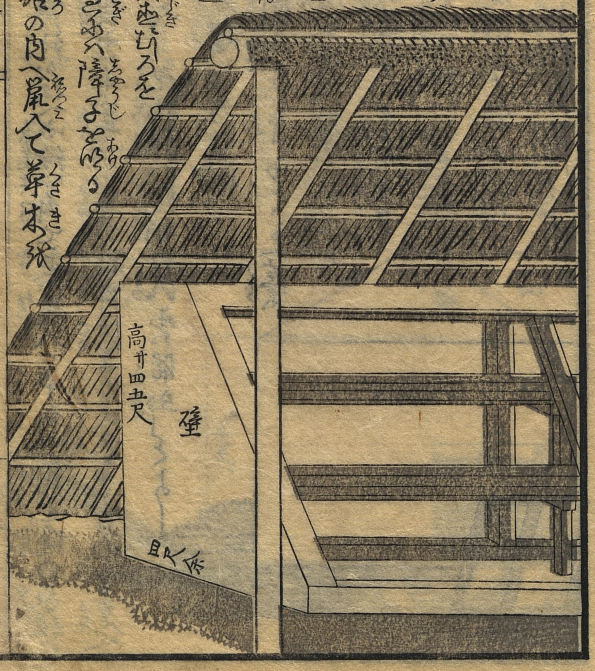
塘窖ぬりだまは事　并圖

按に。本邦の北国寒地などへ。天竺安南等の暖国の草木を植
には。冬の手歯も要なり。冬は皆庵むろに入ぶべし。其庵むろの建様
は塞て南あきたる地は形よし。南に陰なく朝日より夕日まぐよく
あたる所へ建べし。形は器の如蔵を建と同じ。ひは厚きわどよし。南の
方皆障子なり。九月法にて寒風来は扶桑花山丹花使君子の類は
すべて塘の内へ入障子をかけ置。立冬の法十月中旬より。嶺南琉球等
の暖国より来る草木は皆入べし。其内日陰を好物は奥へ入前に是

龍舌草覇王樹の類を蒔。ゑを塘の内ハ土乾ゆへ成れたかけべし。
天晴て暖き
日ハ障子を
そぶし日成
あくよし。然
どを南風ハ
何ハ障子を
だらざ。寒冬
の南風ハ
悪し。寒冬又



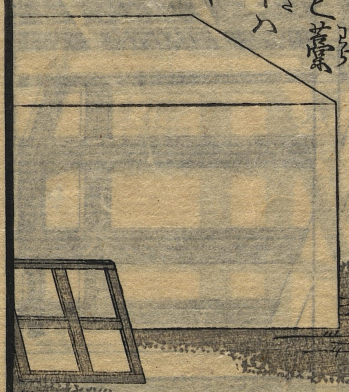
曇りたる日
などハ障子を
ゑべからざ。夕七ツ
時ハより酒
むしろをこゝ
四重も覆べし。
若寒ハてを
俄ハくをきべ悪むしろを
かけべし。八ツ時ゑハ障子を明る
事悪し。又塘の内へ鼠入て草木成



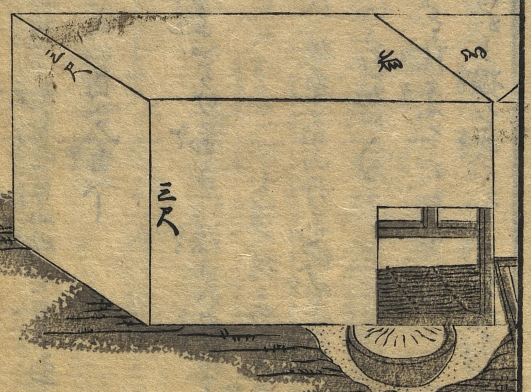
唸ゆあり。其内ハ計ガ弦ヘ小絵を有て並ベ鼠入るゆゑと云ふ。塩の家根ハ
茅にても板皮にても葺べし。春の彼岸ゆより丈夫なるものを先へ
出し追ゝ出さるべし。庵物類ハ清明の頃にハ活出しとよし

方燈むろの図

其造板ハ南向に。茅にても藁
にても。雨霞を掛へ。ひさしの下ハ
地まぐ葺にさるゆゑ。其形ゑく
庵むろの雨霞の如にして。其内へ
高のごとく。後ハ壁にしるもあり。
又陳子にてもよし。穿皆陳子を



合せ桃木を入て。合せ目へ周ぐり伏
せる。此むろへ入るものハ。梅桃櫻海
紅紫蓋の類。其外結の果木にて
苑を開せんと思ふにハ是へ入べし。
内の板子を見るために小くちを
あけ置べし。外よりむろの下へかけて
左ゆ掘て。火鉢へ炭火をよく埋
消ぬ板にて入べし。尤寒日無
量も火を絶ぬらざ。むろの内
火のある所ハ上ハ竹ものこを浸て



上へ湿むしろを敷べし。此むろへ入て大抵三十日程にて盡花開めなり。然ども樹は白咲。紅樹は色薄し。是を暖日に出て日にあてる時は色を出すなり。又夕方よりむろの内へ入置べし

窖の事

あなぐらは南向に入口は明。障子をかけ置なり。深さは五尺より一丈ばかり深く掘。下は平にして。又口方へ棚を掛て樹木を入置べし。然ども窖は湿気多きゆへ。枝桑花山丹花使君子覇王樹の類の陽気を好て甚寒にいたむ物は入べからず。必腐拈るものなり。さして寒氣を恐ざして陰気を好類を入べし○又そさかけむろと云あり。是はまづから掘をもてなり。たゞ樹木を置

渡を作中を通行するなり。其上へ樹の枝に木は浸し箒は おこてかけ。上へ土は かけるも。土は厚行よし。夜方は出して明るをとり。夜はむしろにて覆べし。是に入る物は。萬年青石菖など又多木類。墨物を入るよし

土藏の事

塗垂を同東西へ長く建。皆塗はして。入口も窓も皆南向に明。窓は障子をかけ。夜は戸を立るも是に入る草木は格別寒をも恐ざる百両金珠砂根蘭の類。其外斑入物多木類を入べし。又高き土地にては蔵の縁の下を掘窖にして。又樹木を入べし。上の家根は茅葺又は瓦にて是よし

種樹運送の事

地錦抄に云。椿木荷柚壹圓枝柘は海陰とも籠に入たるよし。せきだん又桶に椿さるは元旦悪重してしるも水の加減しられど。籠の内に水滑く根くさるゆへ。籠は水多かけとを立て滑ぎして根によき程湿を含滑ぎしとよし。陰荷は其籠に四ツ荷も掛さるが元旦に上。二ツ荷は重して悪し。籠の大きかろふとを上。大方味柑籠より。籠の内にいとだとむしろ紙数。椿木一本ゞ打葉を以て。枝を巻よせ候と入。多木数を入る程友性にてよし。しも[illegible]入るもよし。水苔にくつゆる。若なくは打葉を和にて出けの柘に揉て入る。此を苔にかゝるゆへ。籠の上紙剥作ってやろかどにして。ござろ又いとだと莚にて日のさぬ柘に覆。其柘は七日に一度ゞ水をかけ。夏は三日五日に一度ゞ水をかゝる。毎荷なるが塩氣なきかを吟味をべし。但し根えだりかけべし。其ゆへ紙がくるゆを嫌なり。雨降は其ゝ水のかゝらぬ事によくく覆をべし

草木育種巻之上終